

天文教育・研究と和歌山県

我が国には戦前から、世界最高水準と言われるアマチュア天文の活動がある。工場で粘り強く、質の高い観測とその記録、同業間の情報交換、プロの天文研究者と連携する活動がその基礎となっている。現在でも新天体発見(小惑星、彗星、新星など)で日本人アマチュア天文観測者の活躍は世界を圧倒しており、活動拠点の一つである本県では、多くの教育者がこの活動を支えてきた。

その一人である和歌山出身の小樺孝二郎(一九〇三〜六九)は、金屋町に移り住んで、教員として勤めるかわら流星を研究し、昭和一〇(一九三五年)には『流星の研究』を出版した。小樺はアマチュア天文家から日本の流星研究の第一人者となり、研究成果を国内外に発表した。『流星の研究』を読んで天文の道に進んだという人は多い。小樺は大正九(一九二〇)年に設立された天文同好会後に東京天文会会の流星課長としても専門的に活動するとともに、昭和一八年には和歌山天文同好会を設立し、全国の流星研究者と交流を深めた。回三五年の国際地球観測年に際しては人工衛星位置観測装置を開発し、その高い観測精度によってスフィンクス天体物理観測所から感謝状が贈られた。この班は、地元の星の教員を指導して観測に当たり、その指導を受けた教員は児童生徒に天文知識を教えた。金屋町立(現城崎)中学校(現城崎中学校)には天文部があつて、昭和五〇年代後半まで極めて専門的な流星の観測と研究を行っていた。

日本のフラスカリウムの黎明期を支え、本県での天文教育の基礎を確立したのは高城武夫(一九〇九〜二二)である。高城は、日本で初のフラスカリウムを導入した大阪市立電気科学館(現大阪市立科学館)の天文部主任として勤めた

後、昭和三四年に本県初のフラスカリウム施設「和歌山天文館」(和歌山市豊野町)を設立した。ドーム直後が八メートルで、全国五番目のフラスカリウムとして開館した同館は、水遣坂のフラスカリウムの発祥で親しまれた。同五六年にフラスカリウムを有する和歌山県立こども科学館の開館によってその使命を全うして閉館した。高城は天文学の教育普及を目指し、星歴月見帳などの『天文教員』の開発にも精力的に取り組んだ。

戦後から一九六〇年代に活躍した世界的な電波天文学者である畑中武夫(一九一四〜六三)は、天文学の普及に力を注ぎ、様々な雑誌で解説記事を執筆したほか、テレビやラジオの出演を行う、新しい感性の研究者の先駆者となった。田辺圭之助の畑中は、昭和三年に東京帝国大学助手兼東京天文台技手となり、戦後は太陽電波の研究を始めて電波天文学の第一人者となり、国連の場で宇宙空間の平和利用を訴えるなどした。畑中は同二八年に早世したが、『星と宇宙』『宇宙空間への道』などの著書は、今も多くの読者に愛されている。また、同四五年には、その功績を讃えて月の探検のクレタターのひとつが「バナナカ」と名付けられた。畑中が始めた太陽電波の動スペクトル観測に使用されていた電波望遠鏡の最後の世代の一つが、平成一〇年にみさと天文台に移設された。それによりますますその電波望遠鏡は、宇宙空間の水素原子が発する微弱な電波を捉える本格的電波望遠鏡としては日本初となる、パラボラ直径八メートルの望遠鏡に大改修され、研究・教育普及の新しい基盤となっている。

本県の上記録の記述が天文学の活用された稀有な事例として、紀伊徳川家(家系三浦家の領地であった石橋生庵)の記録「紀伊藩五種家系(家系)」(和歌山県和歌山経済文化史研究所蔵)がある。この中に、平成一四年二月に発見された池谷・彗星の前回歸(治四二六六二年)が記述されている。国内の確かな記述として確認されているのはこの「家系」だけで、この発見によって太陽系空間における彗星軌道が精密に計算され、その成果が英国王立天文

和歌山天文館の概観 (取り直す)

ふれんくはらの区画整理

(1) 1/2500

ふれんくはらの区画整理

(1) 1/2500